

2014 vol.31 冬号 源流からのたより

ぽたい!

源流のひとしづく



CONTENTS

- ・事務局長コラム
- ・「源流学」⑥
- ・源流の主役たち
- ・吉野の古代寺院～竜門寺～
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・源流学の森づくり



森と水の源流館

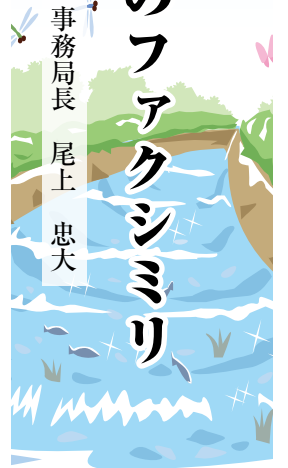


住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

第5回全国源流サミット 奈良県川上村

はじまりは、ある源流からの一枚のファクシミリ

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
事務局長 尾上 忠大



9月5日(金)～7日(日)「第5回全国源流サミット」が川上村において開催されました。これを共催した「全国源流の郷協議会」は、全国各地の河川の最上流部に位置する自治体により、かけがえのない水や森林などの源流資源を流域の視点に立って、源流に暮らす人と源流の恵みを共有し享受する人たちが協働して保全することをめざし活動していま

す。サミットには、同協議会に加盟の9県19市町村の代表や近隣自治体関係者、一般市民ら約500人が参加しました。

当財団も実行委員会の一員として約1年間このサミットの準備に取り組みました。3日目のエクスカージョンや、全体の企画・運営にも関わってきました。

昨年、群馬県みなかみ町でのサミットの視察から帰った参加メンバーのもとへ1枚のファクシミリが届きました。それにはサミットの前進の源流シンポジウムから通算して今回で15回目となるこの催しに対する変化を期待する激励の内容でした。それまでは何名かの外部有識者等からの基調講演と、その結果いつも時間切れで、物足りなさを醸すパネルディスカッションが定番で、「源流」の貴重さと、危機的状況について訴えることに終始されていたように思います。そこで今回のサミットでは、テーマを「真の流域連携」とは何か!とともに語り、つなげよう」とし、「流域圏」を意識した構成として企画をしました。基調講演を省き、首都

吉野川紀の川の3つの河川の各源流地域

と中下流域での活動を実践する団体に登壇していただきました。山梨県小菅村での「多摩川源流大学」の発表や、中流域

での「川の楽校」の取り組み、また源流の長野県木祖村と名古屋市との交流事業実践の成果と、ありがたい反面、受け入れに課題が生じること等が報告されました。そして、これら大都市へ流れ出る河川とは違った吉野川・紀の川でつながる連携・交流の取組みを発表。林業・農業・漁業の第一次産業を結んだ川でのつながりをあえて強調し、河川ごとの特徴が比較できるよう考えました。それを浮き立たせてくれたのが、川上村の『川上宣言』の生みの親である宮口侘地早稲田大学教授(当財団理事)による絶妙なコーディネートで、テンポもよく、参加者を満足させたようでした。今回、外部有識者には、コメンテーターとして客席側からステージと対面するかたちで、適宜感想や参考事例、アドバイスをいただきました。

「真の流域連携とは!」の模範解答を示すには至らずも、コメンテーターの中村文明氏(NPO法人全国源流ネット

ワーク代表)からは「流域が主役となるサミットは、今回が初であり、大変意義あるものであった」との評価も。源流の課題に向けたキーワードの1つ「流域圏」の発想を広げていくきっかけにもなったと考えます。

昨夏、岡山県新庄村の源流仲間からの一通のファクシミリが、実行部隊有志の気持ちを奮い立たせ、何か半歩でも前に進むことができたと感じます。このように離れた源流どうし激励し合うことも、ひとつの「連携」であると思いました。感謝。



「コーディネーターの宮口財団理事(早稲田大学教授)」



潰した豆、塩、米こうじをよう混ぜる

えでもしようかな。だいたい毎年、大豆を4升、米こうじを12升用意して作っている。1回に作る量は、豆1升と米こうじ3升。まず、山からの水で新しい豆をきれいに洗った

て、わが家の味噌づくりの話。今までも、昔はみな手づくりやっていた。今でこそ、豆も米こうじも買うけど、昔はみんの手づくりやっていた。畑で作ったもんを食べ、調味料も手づくりやっていた。田舎の特権かもしれないけど、安心なもんを食べられる、ほんま幸せなことや。山間で穫れたハクサイもキャベツも柔らかくうて、うまいんやぞ。今までわしは病院にもかかったこともないが、それは「安心できる食」のおかげやと思ってる。

ゆた後、塩を加えて混ぜ、人肌程度になったら米こうじを加えてよう混ぜる。途中、豆の煮汁を入れながら、しつかり練るのがコツや。よう練らな、美味しいのができん。ここで「キザラ」を1合入れるのが、わが家の隠し味や。ある年、「キザラ」がなかったから入れへんたら、

後、たつぷりの水に漬けて一晩寝かせ、そのまま火にかけて、柔らかくなるまで煮るんや。手で押したら、潰れる程度のがちょうどええ具合や。豆の炊いた汁は後で使うさかい、5カップぐらいとっておくのを忘れずに。ゆでた豆は美味しくて、子どもの時分は母親の目を盗んで食べて、よう怒られた。ほくほくしてうまかったぞ。



柔らかくなった豆をミンチ状に潰す

達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」⑥伝統食 ~味噌づくり~



よう練ったもんを適当な大きさで丸めて、壺の中に、空気を抜くように投げ入れていく。もちろんな壺の底には先に塩を引いとかなあかん。そうやって練ったもんを全部詰めたら表面をならして、その上に塩を一面にかけて。しつかり塩をしとかな、カビが生えるから、味噌肌が見えんように塩をせなあかん。そしてその表面にびたつとくつつくようにラップで蓋をし、壺を袋に入れて縛ったら、あとは寝かすだけ。壺は風通しの良いところに置いて、土用が過ぎたら、ようやく出来上がりや。

味が全然違ってな、「キザラ」が旨みを出してくれてることに気がついたんや。母親の時分はしてなかったけど、おちゃん（嫁）のアイデアで、今では「わが家の味」になっている。



よう混ぜたものを壺に詰める

今の人は出来上がったもんしか知らんけど、こういうプロセスを知ること大事なことや。何が入っているか、よう分かる。「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録され、見直されるようになったが、日本人の体が一番合った食べもんやと思う。今では何でも買える時代だが、この冬、いっぺん味噌づくりに挑戦してみるのはどうやろう。お味噌汁の味が断然に旨くなる。先人の知恵には学ぶべきところばかりや。しつかり学んで、その中から、それぞれの生活で生かしてほしいと、わしは思っている。

川の上村のある地。域ではお味噌は人にあげるときは10円でももらわなあかんと言う人がおった。何でも味が変わるらしく、娘からでも百円もらったそうだ。もちろん、言い伝えというか、迷信のようなもんやと思うが、面白い話や。

川の上村のある地。域ではお味噌は人にあげるときは10円でももらわなあかんと言う人がおった。何でも味が変わるらしく、娘からでも百円もらったそうだ。もちろん、言い伝えというか、迷信のようなもんやと思うが、面白い話や。



空気を抜くようにしつかり詰める



塩を敷いた壺に投げるように入れて

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

虫夏草は、チベット等の高地に棲むオオコウモリガの幼虫に生えるコルジセプス・シネンシスという1種類を指します(非常に高級品で、安い物には偽物も多いとか)。

身近な森でも、冬虫夏草に出会うことは難しくありません。ただ、小さく目立たないものが多いので、その気になって探さないと見つけることはできません。

カメムシから生えるカメムシタケ(亀虫草、図4)は、太さ1mmくらいの黒く細い柄の先にマッチ棒の先くらいの大きさの朱色の頭部を付けます。カメムシの死体は、落ち葉や地中に埋もれていることが多いので、地上数cmの高さにある「マッチ棒の先」を見つめる気合いが必要です。



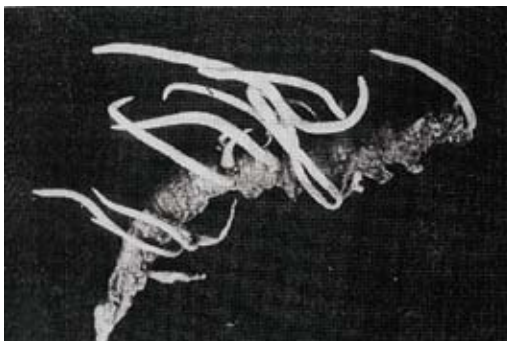
シャクトリムシハリセンボン(尺(図4)カメムシタケ



(図5) シャクトリムシハリセンボン(川上村)

取虫針千本、図5)という種類は、蛾の仲間でもシャクガの幼虫に発生することが多い虫草です。尺取虫自体が枯れ枝に擬態していますので、見つけにくいキノコです。

オオノムシタケ(大野虫草、図6)も蛾類の幼虫に生えますが、非常に珍しいキノコです。1998年6月に奈良県五條市の山中で、後輩が見つけた虫草だったのですが、珍しい種類だと思ったので、京都のきのこ研究者の吉見昭一先生に送って見ていただいたところ、オオノムシタケと同定されました。なんと60年ぶりの再発見だったと聞いて驚きました。奈良県南部では、こんな希少種も見つかっています。



(図6) オオノムシタケ(五條市大塔町)

イトヒキミジンアリタケ(糸引微塵蟻茸、図7)は、樹幹に張り付いて死んだ蟻の体から生えます。

いくつかの冬虫夏草を紹介しましたが、日本には『日本冬虫夏草の会』など熱心な人たちがいて、世界的にも研究が進んでいます。最近も「冬虫夏草生態図鑑」という図鑑が出版され、約240種の

冬虫夏草が生態写真等で掲載されています。

冬虫夏草の本を出されている盛口満氏の言葉をお借りすると「冬虫夏草は、虫から生えるので、そのキノコが何を食べて育ったのかが一目瞭然だ。だから、一目で食物連鎖を実感できる生き物なんだ」と。そういう意味でも自然観察が趣味の方には、ぜひ身近なフィールドで見つけてほしい生き物であります。



(図7) イトヒキミジンアリタケ(大和郡山市)

<参考文献>

- 冬虫夏草生態図鑑、日本冬虫夏草の会編、誠文堂新光社(2014)
- 冬虫夏草ハンドブック、盛口満文、安田守写真、文一総合出版(2009)
- 冬虫夏草を探しに行こう、盛口満著、日経サイエンス(1996)
- 冬虫夏草菌研究会通信 No.2,9p、オオノムシタケ(仮)、吉見昭一(1998)
- 冬虫夏草菌研究会通信 No.3,5p、オオノムシタケの追録、吉見昭一(1999)



「不思議なキノコ、冬虫夏草」

キノコはいろいろなものから生えますが、昆虫から生える種類も知られています。冬虫夏草(とうちゅうかそう)という変な呼称で知られるキノコですが、川上村の山でも探せば、その姿に出会うことができます。虫にとりつき、虫を殺し、その栄養を吸収してキノコを発生させる。そんな不思議な生態を持つキノコについて、少しお話ししましょう。

丸山健一郎 (関西菌類談話会、日本菌学会 会員)

秋になると、キノコ料理の特集がマスコミで取り上げられたりして、どうも「キノコのシーズンは秋」とのイメージがあるようです。

森の生き物を観察している方で、キノコにも目が向いている方は「キノコのシーズンは秋だけじゃない」とご存じでしょう。種類を問わなければ、キノコは年中見ることができるのです。日本には三千種を超えるキノコがあり、まだ名前も付かない種類も多いのです。ただ、奈良付近では梅雨明け頃と秋が種数・発生数が多いことは確かです。



(図1) ヤグラタケ (大和郡山市)

さて、キノコを観察するようになると、キノコが「何」から生えているかを確かめておくことが大切になります。外観の似たキノコでも、地面から生えているのか、木材から生えているのかで、種類調べの見当が違ってきます。



(図2-1) ナガエノシギタケ (五條市大塔町)

例えばシイタケは、枯れた広葉樹の幹や枝に発生します。マツタケは主にアカマツ林の地上に、ベニテングタケはシラカバの林に発生します。キノコは種類によって生える物や林相がだいたい決まっているものが多いのです。このように、あのキノコに出会いたいなら、あの木が多い林に出かけようとか、採集地選びが大切になってきたりします。このあたりは昆虫採集と感覚が似ているでしょうか。

多くの種類は、地上や材木や落ち葉などから発生するのですが、ちょっと変わった物から生えるキノコもあります。たとえば、ヤグラタケというキノコ(図1)は、古くなったクロハツモドキなどのキノコの上に生えます。ナガエノシギタケというキノコ(図2-1、図2-2)は、モグラなどの動物の巣近くにある排泄場所から生えたりします(この事実を発見したのは京都大学におられた相良直彦先生です)。カキノミタケというキノコ(図3)は、カキノ種子からしか生えませんが、



(図2-2) ナガエノシギタケ模式図

昆虫の死体から生えるキノコもあります。昆虫にとりつき、体内で増殖して、虫を殺してキノコを発生させるので、昆虫の病原菌と言った方がよいのかもしれませんが、とても不思議な生態を持つキノコです。多くは夏期に見られ、冬は虫の姿だったものが、夏に草(←キノコのこと)に化ける変わった生き物であると思われたらしく、古く中国で「冬虫夏草(とうちゅうかそう)」と呼ばれるようになったそうです。単に虫草(ちゅうそう)と略して呼ぶ場合もあります。

漢方薬としても珍重され、冬虫夏草という呼称を見聞きされた方も多いと思います。漢方薬でいう冬



(図3) カキノミタケ (高取町)

— その十八 —

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

吉野の古代寺院 2

〜竜門寺〜

吉野と国中を分ける竜門山地の最高峰、竜門岳（標高904.1m）の南麓に、竜門岳を源とする嶽川という川が流れています。嶽川の渓谷には竜門の滝とよばれる滝があり、吉野町の森林セラピーコースの一つとなっています。

このコースを歩くと、竜門の滝周辺に「竜門寺本堂跡」「竜門寺塔跡」などと刻まれた石標が建てられた平地がいくつも見ることができます。これは竜門寺と呼ばれる古代寺院の建物跡です。

竜門寺は、明日香村の飛鳥池遺跡から「龍門」という寺名が記された木簡が発見されていることから、天武天皇の時代（在位673〜686年）に創建されたのではないかとの説があります。ただ寺跡からは奈良時代の瓦や土器は見つかっていませんが、飛鳥時代の瓦や土器は見つかっており、飛鳥時代の「竜門寺」はこの場所では無かったのではないかとはいえ人もいます。

竜門寺は、古代の文献に割とよく登場しています。それらによると、明日香村の岡寺を創建した義淵（643〜728年）が開基し、久米仙人・大伴仙人・安



竜門の滝

比曾寺とは異なり、狭い谷の中にあるため見晴らし

曇仙人と呼ばれる修行者たちがこの地で修業に励んでいました。特に久米仙人は空を飛んだと伝えられています。平安時代に入ると清和上皇（850〜881年）・宇多上皇（867〜931年）・菅原道真（845〜903年）や藤原道長（966〜1028年）がこの寺を訪れ、久米仙人が修行した洞窟を見学したり、

本堂で5000個の燈明を捧げる儀式が行われています（『扶桑略記』）。その頃に持ち込まれたものでしょうか、燈明皿として使われたらしい素焼きの皿が大量に見つかっています。それらを分析したところ、京都市伏見区深草周辺で焼かれたものでした。

このほか鎌倉時代の瓦や土器が大量に見つかっているため、鎌倉時代には建物が存在していたようですが、江戸時代に本居宣長（1730〜1801年）が訪れた時には建物は何も残っていませんでした（『菅笠日記』）。

27号で紹介した



竜門寺塔跡

は良くありませんが、寺跡の中心部をセラピーコースが通っており、整備も進められています。竜門の滝を見ながら修業に励んだ仙人たちの姿を思い浮かべてみてはいかがでしょうか。

【参考文献】

『奈良縣綜合文化調査報告書 吉野川流域』奈良県教育委員会 1954年
達 日出典『奈良朝山岳寺院の研究』名著出版1991年



蜻蛉の滝の植物の説明をする川端一弘先生



吉野山の植物の説明をする尾上聖子先生



ヤマノイモのむかご



ダイコンソウ



標本の作り方もばっちり



ヌスビトハギ



ナベブタムシ



熱弁をふるう谷幸三先生



音無川で水生生物を採集しました

もともと街と里と森の3箇所での夏の野草をしらべて比較する予定でしたが、雨が降りそうだったり、雨が降ったり、雨が止んだり、天気に振り回され、近鉄吉野駅周辺（吉野町）とあきつ小野周辺（川上村）の2回の開催となりました。

まず、身近に観察できる野草だけでした。くさんあることに驚きです。アスファルトのわずかな隙間にも、日当たりの悪い湿った場所にも、たくましく育っています。それぞれの特徴やよく似た種類との見分け方など、他にシダやコケもあわせてじっくり観察しました。

また、里と森とで共通する種もありましたが、環境による違いも見られました。



今回、観察できた野草をいくつか採取し、押し花にして参加者等が持ち帰りました。自由研究のノートにまとめられたのか、アート作品として飾られたのか、どちらにしても楽しんでいただけたと思います。

里（吉野町）…32種

アカネ、アキノタムラソウ、イヌガラシ、エノコログサ、オオマツヨイグサ、オニドコロ、オヒシバ、カタバミ、カラムシ、カラスウリ、ガンクビソウの仲間、キツネノマゴ、クサノオウ、クズ、ゲンノショウコ、ササクサ、シシウド、センニンソウ、ダイコンソウ、ツユクサ、ハキダメグク、ヒメジョオン、ヘクソカズラ、ペニバナボロギク、ミスヒキ、メヒシバ、ヤブガラシ、ヤブヘビイチゴ、ヤマノイモ、ヨウシュヤマゴボウ、ヨシノアザミ、ヨメナ

森（川上村）…30種

アカネ、アキノタムラソウ、アレチヌスビトハギ、イヌトウバナ、イワタバコ、ウワバミソウ、オニドコロ、カエデコロ、キッコウハグマ、キツネノマゴ、キンミスヒキ、クズ、ゲンノショウコ、コニシクソウ、サジガンクビソウ、タケニグサ、タチドコロ、チドメグサ、ツルアリドオシ、トキワハゼ、ヌスビトハギ、ハハコグサ、ボロギクの仲間、ミスヒキ、ミチタネツケバナ、ミツバ、ミヤマシラスゲ、ミヨウガ、ヤブヘビイチゴ、ヤマノイモ

観察できた野草



今年も奈良新聞との共催事業として、トヨタ AQUA SOCIAL FESJ Presents「きれいな吉野川を未来に残そう」第2回として開催されました。当日は雨が降るあいにくのコンディションでしたが、午前58人、午後37人の参加者で音無川の生き物をしらべました。去年に比べて水は多かっただけが影響したのか、今年はとても汚れた水にすむ生き物は見つかりませんでした。きれいな水にすむ生き物がほとんど（17種）で、ややきれいな水にすむ生き物5種と合わせても、大変きれいな水であることがわかりました。谷幸三先生のお話も大変面白く、充実した観察が行えました。

調査結果

河川名：音無川
 調査地点：川上村蜻蛉の滝下
 年月日：2014年8月2日（土）
 時刻：13:45～14:10
 天候：小雨
 気温：24℃/水温：21.5℃
 調査地点の周り：深谷
 川岸の状態：右岸は護岸、左岸はスギ林
 川幅：4m
 調査地点：平瀬と淵
 川底の状態：小石・砂
 流れの速さ：緩やか
 水深：10-30cm
 にごり：なし
 臭気：なし

きれいな水（17種）

- ・カジカガエル（両生類）・アブラハヤ（魚類）・カワヨシノボリ（魚類）・アユ（魚類）・サワガニ（甲殻類）・ヤマトフタツメカワゲラ・ヒゲナガカワトビケラ
- ・コカクツツトビケラ・ニンギョウトビケラ・クロタニガワカゲロウ・ミヤマタニガワカゲロウ・フタスジモンカゲロウ・オオアメンボ・タベブタムシ・モンキマメゲンゴロウ・エルモンヒラタカゲロウ・フタバコカゲロウ

ややきれいな水（5種）

- ・アカハライモリ（両生類）・カワムツ（魚類）・カワニナ（貝類）・ダビドサナエ・ハグロトンボ

汚れた水でもすめる種（1種）

- ・ガガンボ



6月8日(日)

源流学の森づくりとは、20年ほど前に伐採され、再生しつつある天然林をもとの立派な源流の森に戻す取り組みで、試行錯誤が続いています。

この日の作業は、採集したドングリから育てたミズナラの苗の植え替えです。2〜3年くらい前から、源流学の森の一角をみんなが利用できるドングリの森に育てることを一つの目標にしています。伐採された後、なかなか思うように上手く森づくりが進まず、前回までは山小屋



のこぎりの目立ての練習

の近くまで車で入ることができましたが、崩れる箇所も多いため、今回からは約1時間、歩いて登ることになりました。苗や道具をみんなですて、えっさほいさと運びます。この苗を源流学の森の環境に慣らすために、いったん小屋の近くの囲いの中に植え替えます。そして、秋から冬頃に源流学の森に植え付ける予定です。多くの森づくりではこれまで苗を購入して植えてきましたが、他地域から導入された苗は遺伝子汚染などを引き起こすなど悪影響が指摘されています。地元の子から育てた苗を推奨したり、他地域からの種苗の導入を法的に禁止したりする自治体も増えてきているそうです。このドングリの苗から育った森はどんなふうになるのでしょうか、今後が楽しみです。また、ドングリの苗の里親になってもらうなど、源流人会会員の方に限らず多くの方々にこの源流学の森づくりにか



ミズナラの苗



作業道の補修もしました

かわっていただければ嬉しいです。その他、作業道の整備をしたり、ノコギリの目立てを習ったりもしました。

源流人募集



源流人とは

かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは

集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

年費 郵便振替 00940-1-331163

もりもり 水源地の森守募金

にご協力ください

ありがとうございました。

平成25年度、153,835円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学

4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしくお願いします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

発行日:平成26年12月発行
発行所:公益財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館
TEL:0746-52-0888

「表紙の写真:トガサワラの実生(芽ばえ)」